

# 備陽史探訪

第52号

発行

備陽史探訪の会

福山市多治米町5-19-8

TEL(0849)53-6157

## 古墳めぐり二題

副会長 山口 哲 晶

古墳研究会では毎年春と秋に御承知の通り古墳めぐりを行っています。春の古墳めぐりは「親と子」のタイトルがついている通り五月五日の子供の日の為のイベントとして行っています。はじめた頃は途中何度も

「もうやめよう、もうやめよう」と思いながら何度挫折しそうになったことか。それが私の師匠とあがめる篠原氏の助言もあり今年で九回目をむかえ、来年は栄光の第十回目を迎えます。今や当会の行事として定着し、市民の間にもはや定着した感がある。私の職場は病院だが、医師より時々、時間の都合ができたら家族全員で参加したい」という言葉を聞くと、友人の口からも「自分の子供も参加させたい」と言われる事がある。そんな言葉を耳にすると私

自身続けて来てよかったと今つくづく思う。コースの選定には苦労するところもあるが、後で会報に載る感想文を読むと続けて来てよかったと思うと同時に何か報われた気持ちにつつまれる。

古墳というものは何も近畿地方だけにあるものではなく、福山市周辺にもすばらしい古墳が沢山あるという認識、古墳を貴重な文化財として見るという意識、さらに文化財の保護についての認識を市民レベルまで拡大していければこんな喜びはないだろう。

こんな気持ちは親と子の古墳めぐり実行委員の総意なのだろう。そんな気持ちの現われかどうかは知らないが去る三年前に秋にも古墳めぐりをしてはどうか、春は福山市を中心と

した地域で秋は少し遠出をしてバス例会としてはどうかという具合である。そして「ハイ、ハイ」と安受けあいして始めたのが秋の古墳めぐりであった。対象は当会々員、バスで行ける範囲である事が条件である。

初回は吉備路が選定され講師は網本氏、二回目は吉備路でも東方の上道氏の本拠、山陽町周辺であった。この間に岡山県を代表する、日本国中でも他地域にもひけをとらないすばらしい古墳を見て来た。そうこうしているうちに今年第三回目になった。実を言うと当初からの秋の古墳めぐりのコースについては候補を四つ程頭の中に掲げていたのである。これで少なくとも四年間は悩まずにすむ、大丈夫とタカをくくっていたのである。それが今年で三回目、当初のコースの四分の三は使い切ってしまったことになる。来年あたりからまた次のコースの選定に頭を悩ますつらい日々が待っているのである。こんな事を考えている私を鬼は笑っているのだろうか。それはともかくとして今年の秋の古墳めぐりは当初頭の中に描いていた第三番目のコース、豊田郡本郷町の古墳めぐりです。備後と安芸は沼田川によって分けられ東が備後の国、西からは安芸

の国となるわけです。今回は沼田川の東側で沼田川の支流の尾原川流域の古墳を見学するコースです。この地域は備后国と境を接するあたりで周田四郎程のせまい範囲の中に広島県でも数のない家形石棺の大部分が集中しているのです。そこで、それらの家形石棺や古墳の石室を見ながら私達の住んでいる備後の国、さらには吉備の国をながめてみようというわけです。前回、前々回は吉備の中で、しかも中枢部で吉備の国というものをながめて来ましたが、今回は少し視点をかえて外からながめてやろうという事です。何か新しい事が見えてくるかもわかりません。石棺を語る場合、その種類や細かな形態は勿論のこと今やその石材についても考えていかななくてはなりません。その石材については倉敷考古館々長の間壁忠彦先生の著書の中に今までの間壁忠彦先生の著書の中に今までの事についても非常に意味がある事があった時の興奮、さらに古墳の石材を分析する時の苦労話などが大変興味深く書かれていますので興味のある方々は一読を御勧めします。

そんなわけで今年の秋の古墳めぐりは十二月の一日(日曜日)に行ない

ます。見学する古墳その他はまず南方神社境台にあります石棺、次に貞丸一、二号古墳、大日堂庭内の石棺の蓋、さらに御年代古墳、梅木平古墳、横見廃寺跡、溜箭古墳の以上八ヶ所です。道が少し狭いのでもしかしたら——ですよ。もしかしたら行きはバスで途中の一部はテクテク歩く事になる——かも知れませんが、何卒御了承下さい。日程及び費用等につきましては下欄を御覧下さい。さあみなさん、本郷町の古墳が私達をまっています！

さてもう一つのトピックス。来たる十一月二三日（土旺日）に日々の勤労に感謝して福山市立女子短大主催の古墳めぐりがあります。コースは親と子の古墳めぐりで太鼓判の駅家コース。二子塚古墳に始まって宝塚古墳、狐塚古墳、山の神古墳、二塚古墳で備南でも著名な古墳の多いコースです。こちらの方にもごぞって御参加下さい。（P8参照）

今まで残念ながら見られなかった方や短大生のピチピチギャル、やさしい先生方と一緒に古墳めぐりをしたいという動機不純な方も是非どうぞお待ちしております。

## 十二月例会 〃秋の古墳めぐり〃

バスツアー

### 本郷町の古墳を訪ねて

### 参加者募集

講師 当会副会長 山口哲晶・古墳部会副部長 網本善光

（時） 十二月一日（日）

午前八時福山駅北口キャッスルホテル前集合

（午後五時福山着解散予定）

（目的地） 豊田郡本郷町の古墳

● 南方神社境内石棺（古墳後期）

● 貞丸一、二号墳（県史跡）

● 大日堂境内石棺

● 御年代古墳（国史跡）

● 梅木平古墳（県史跡：県内最大の横穴式石室）

● 横見廃寺（県内最古の寺跡）

● 溜箭古墳（竜山石製石棺）

（会費） 会員 二五〇〇円（バス代等）

一般 二八〇〇円

（定員） 四五名

（参加申込） 十一月十七日以降、電話か葉書で事務局までお申し込

み下さい。定員に達し次第締切ります。

（備考） 雨天決行、弁当持参、身軽な服装で……。

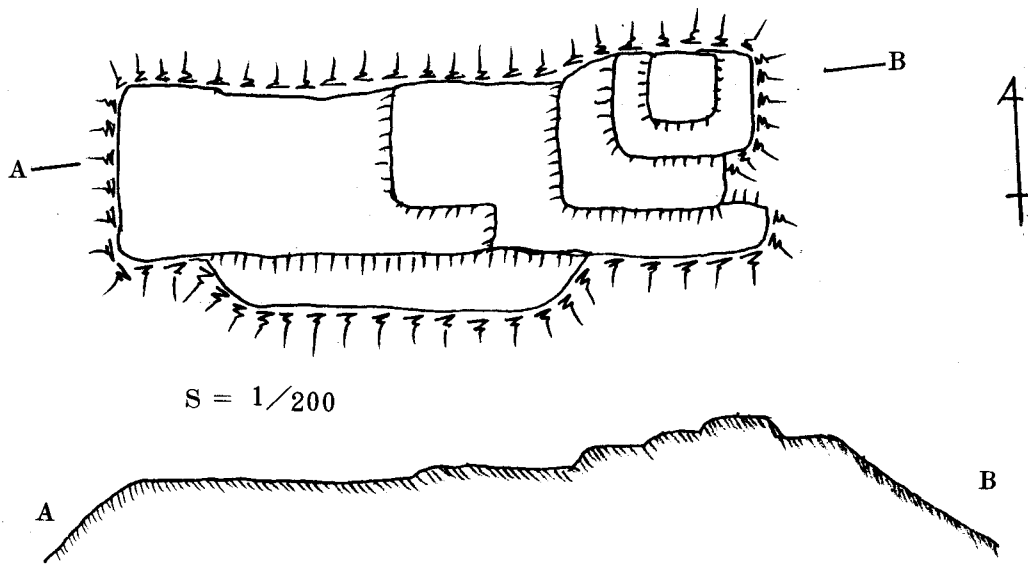
※ お問い合わせは事務局まで。

## 中世史へのアプローチ

〃福山市千田地区の場合〃

出内 博都

深安郡千田村は元禄検地帳によれば五一七石六斗八升八合の村であるが、福山市街から峠一つこえた神辺平野の一角にあるので現在では勿論、近世以降めまぐるしく変貌をとげた地域の一つである。古代においてはいわゆる穴の海の入江の一つで良港と市で栄えた蔵王の深津市と山陽道の宿駅神辺とを結ぶ幹線道の沿線として古くから開発された地域である。千塚古墳群や、蔵王原遺跡については有名であるが、中世の村づくりのあととは必ずしも明らかでない。西備名区によれば、康正二年（一四五六）の造内裏段銭引付に「三貫二百廿文、大和弥九郎殿備後十田村段銭、案に十田村は千田村の誤りなるべし」という旨の記事と、天文十七年の神辺城攻の時、蔵王山の北麓に向い城を作って三年間在職した平賀氏（賀茂郡高屋の城主）の逸話を伝えている。然しこの城については神辺の要害山麓の「安芸丸」との伝承もあり明らかでない。千田という自然村落がいつ成立し、どのような政治関係の中



### 宇治山城略図

福山市古文書館所蔵 高田文庫にある某氏の鳥瞰図  
をもとに復元(昭和24年12月24日踏査)  
方形プランの団郭式山城 土居を兼ねた居住性も考  
えられる。

で近世の村になったかは判らない。古代については深津郡中海郷(なかつま)に属しており文字通り穴の海の入江であったと思われる。検地帳によれば、①横ヶ市谷、②大きこ谷、③岡谷、④二ツ川、⑤宇山谷、⑥中条坊谷、⑦猫ヶ市谷、⑧井坂谷、⑨弓場谷、⑩たわ谷、⑪横尾谷、⑫本谷、⑬おさる谷、⑭池口谷などの地区に分かれ、幾百という固有地名を伝えてい。番地制のない当時として個々の耕地をより具体的に表現しようとする努力がうかがえる。それらの地名の中で、土井(土居)、小土井、弓場、かりば、刑部田、孫才などは、峠山(盈進高校のある山)の南東麓の現千田町の心臓部にまとまっております、どうみても中世土豪の村造りの中心をなした地域と思える。この村がどんな政治関係の中で成長したかはわからないが、大まかにみて、備南の土豪として一時勢力をはった杉原氏の圏内であった事は考えられるが、具体的には前出の大和氏、平賀氏の断片的伝承記録の他に、宇治山城、宇治入道法圓の名が伝わっている(西備名区)宇治山城は千田と神辺の境にあり、現在は全山とり崩して天理教会の建っている小さな山城で、福山城の古文書館の高田文庫の

中にある某氏の見取図から復原すると東西に二十米程の小城である。これは村造りの中心であり、いざという時の詰の城とも思えないものである。宇治入道なる人物も不明であるが、おそらく附近の城主又はそれに連る者が宇治山に築いた隠居城であったものと思える。(附近の勢力圏からみておそらく杉原氏の一族と思える)そうであるとするたまたまと峠山(おそらく山城跡であったと推定される)の東南麓の諸施設は誰のものかということになる。(前出の地名の中で孫才は馬子宰ではないか、おそらく軍事的に重要な馬の飼育管理の施設と思える)千田の古地名で○免まをという免田が少ない事、弥次郎門かど、惣市郎前、みつもと、孫七分、治助分、久蔵分、与五郎谷など人名の地名が多いことなどの特色がある。(これをどう考えるか一つの課題である)自然条件での地形の変化が著るしく又人的開発の進展の多い地域なので古地名が失なわれた事は否めないが、山城と土居と垣内(がいち)がセットになった自然村落と考えられる。この観点からみると蓮池の西方で然も国道三一三号と一八二号バイパスの交叉点につき出た山が検地帳で池口谷の「城山」として出てい

る。城山を背にして、土居、小土居、弓場、かり場、猫が市、横が市、孫才と見事な設定をしている。この城山にはたしかに郭状の平坦地が数段あるが詳細は未調査である。こうした現地の状況の中で歴史の主役となる人物は果して誰か、入江の寒村中海郷から千田村になるのはいつか、これを語る史料はないが、長禄三年（一四五七）六月二日付、足利義政御判御教書（越佐史料三〇角川地名辞典）の大和梅茶法師所領安堵状の中に「吉津荘内千田村」と出ている。この吉津荘は「経俊卿記」正嘉元年（一二五七）九月廿一日の条や、正安三年（一三〇一）九月十一日付前勘解由次官頼経奉書（壬生家文書）に「備後国吉津庄、貞応以後新立庄候」とあるが、貞応は一三二二年（一二三三年でかなり古い荘園といえる。その後正平八年（一三五二）十一月廿四日、足利直冬が吉津庄内木庄を周防阿弥陀寺に寄進している。これらからみて吉津荘の成立は鎌倉初期でその中に千田も含まれるとすればこのへんが千田村という村の最古の歴史といえよう。然もその吉津荘が延徳五年（一四九三）に「吉津保上分」の場合保は荘園とみてよいが在地の武士（杉原氏か）によって

押領されている記録もある（室町幕府奉行人連署奉書案〓北野社家日記）又福山志料には吉津の永徳寺開基寂室和尚の語録の中に「建武元年備後州吉津平居士雅響師道其室竹居」とあり、この平居士が杉原氏とすれば早くから杉原氏と吉津荘従って荘内の千田村とも杉原氏は関係あつたと思える。然し千田に残る人物伝承は前出の大和弥九郎である。この大和氏は杉原氏と同族で、垣平の子宗平が大和系を名のり弟光平が杉原系を名のっている。この大和氏は幕府の奉公衆で、三河国や丹後国にも所領を持つているがその一族が杉原氏を頼って早くからこの地に勢力をばつたものと思える。前出の大和梅茶法師は大和氏がこの地を代官支配していた証といえよう。大和氏がその本拠を丹後国河守郷（段銭九貫五百九十文）におき、奉公衆として京に住み、代官支配をした千田村であるし、又、いざというとき同族杉原氏の勢力圏内にあることから山城には重きをおかず初期のまゝで荒廃したのではないかと思える。吉津の荘との関連で千田の中世史へのアプローチを試みたが、当然附近の奈良津、菟路、坂田との関連を考えねばならないと思う。

大和弥九郎と同時期の大和氏は大和々々守、同佐渡守、同彦三郎、同坂田次郎左衛門尉（千田坂田村と関係あるか？）同兵庫助（声品郡柞磨領主）同三重左京亮などが常徳院御動座当時在陣衆着到「東山時代大名外様附」（群書類従）に出ている。こうした一族が中国路に所領をもち奉公衆を勤めていたと思われる。

備陽史探訪の会城郭・古墳研究部会

古墳調査作業計画

平成三年の事業として、古墳部会を中心に下記の計画で神石郡油木町の古墳調査を行います。都合のつく人にご協力をお願いします。

- 一、下調査 七月二〇日 四人（済）  
七月二一日 四人（済）  
十一月一〇日 四人
- 二、現地作業  
十一月二二〜二四日 一五人  
十二月 七〜八日 一二人  
十二月一四〜一五日 一二人  
十二月二一〜二二日 一二人

（この他に遺物・出土品の調査は適宜行う）  
一日でもご協力していただける人は事務局までお知らせ下さい。以上の日程は都合によって変更することがあります。

北部図書館行事

服部大池周辺の古墳めぐり

十一月一日（日）午後一時〜五時（小雨決行。雨天の場合は十一月二四日に順延）北部図書館緑地帯に集合してください。

見学場所 駅家町のシンボル、服部大池周辺にかけての古墳等を歩いて見学します。（二塚古墳、山の神古墳、大迫古墳、北塚古墳ほか）  
講師 園尾 裕氏（福山市教育委員 会文化課学芸員）  
その他・小学六年生以下の児童については保護者同伴で。・動きやすい服装でご参加ください。お問い合わせは 福山市北部図書館 ☎七六一四八二二まで

第四十五回中世を読む会

―中世武家文書を読む―

（時）十一月十五日（金）夜七時  
（所）福山市中央公民館2F和室  
（会費）無料（但テキスト代要）  
（問い合わせ先）  
城郭研究部会 出内博都  
（〇八四九）五五一〇五三五

# 山城と道

## 神石郡石屋原城跡を例に

田口 義之

十年近く前になるが、松永の山城研究家藤井高一郎氏と神石郡三和町の山城跡を歩いたことがある。三和町という戦国時代に備後の国衆として聞えた馬屋原一族の本拠であり、我々の目的も、固屋城や九鬼城といった同氏の山城跡の見学であった。

両城とも古来より有名な山城であつて、遺構といい、規模といい、さすがに一見の価値あるものであつたが、その帰り道ふとしたきっかけで寄つた父木野の石屋原城跡も中世山城の一類型を示すものとして注目すべきものであつた。

福山から備北の名勝帝釈峡に行くには、国道一八二号線經由の東まわりくと、新市町から北に上る西まわりとのコースがあるが、この西まわりのコースを通つて、道が神石高原に出たところにこの城跡はある。位置は現在の行政区画で言えば神石郡三和町大字父木野字郷、かつての志摩里庄父木野村である。

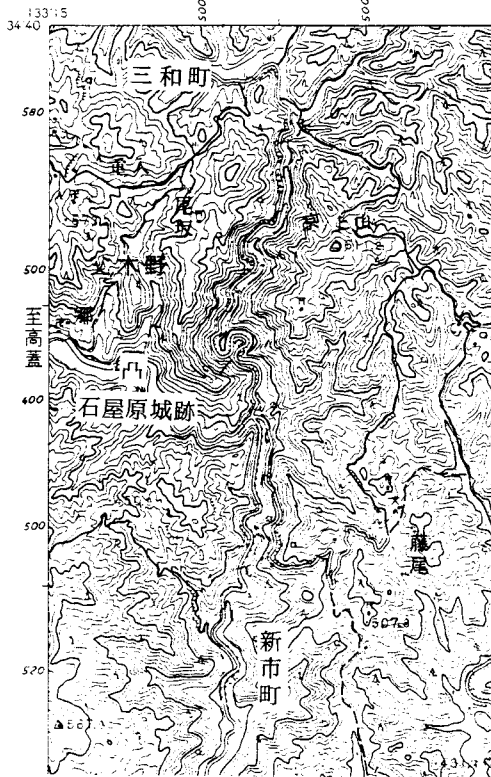
城跡は三和町高蓋辺りに源を発する芦田川の支流、神谷川が流路を

東から南に変える湾曲部の、南から北に突出した尾根先端部に残り、眼下に神谷川の流れと、県道を見下すことが出来る。平地からの比高は約五十メートルである。

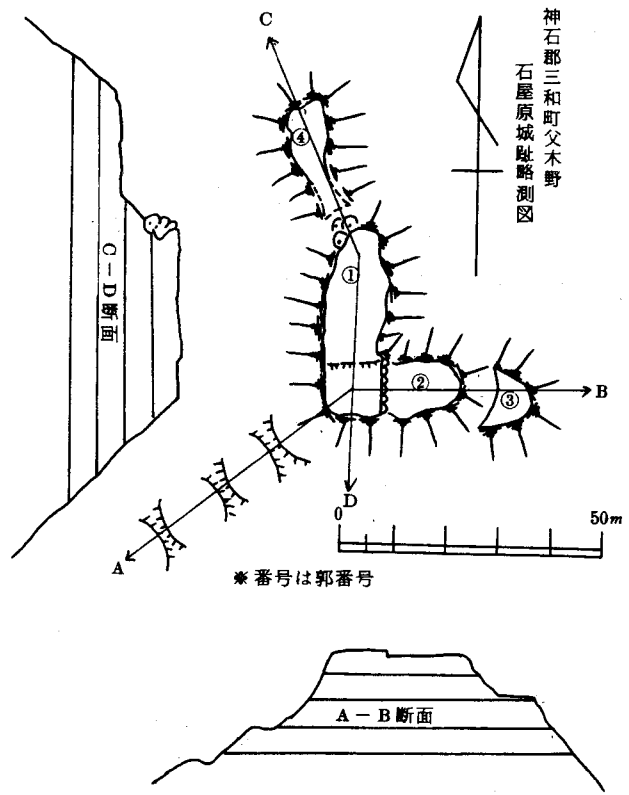
城跡は神谷川に臨む尾根を空堀で断ち切り、山頂の南北三十四メートル、巾十メートルの①郭を中心に、東に高さ一メートルの石垣をはさんで十五メートル×十メートルの②郭、さらに十メートル下つて十メートル四方の③郭、北に十五メートル低く南北二十七メートル、巾七メートル前後の④郭を築いただけの簡単な構造であるが、頭を悩ませたのは、その立地であつた。

中世の山城は普通、その眼下に可耕地を有し、国人、或は土豪層の所領経営の一環として築かれる場合が多いが、石屋原城の場合は周辺にわずかの谷田(但し、神谷川の氾濫原にあるため中世に逆上るかどうか不明)があるのみでこの範ちゅうに入らない。

そこで最近話題になつてゐる、山城即ち関所とする見解にあてはめてみた。しかし、この説によつてみても、現在の主要道路となつてゐる谷底の道は近世以降のものといわれ、山城の年代と一致しない。中世の主



石屋原城跡附近 (1:50000 井原)



要道は尾根上を走っていたのである。とすると、石屋原城が城として機能していた時代、中世後半期の交通路を別に求めなければならぬが、国土地理院の地図を眺めてもそれらしいものは見あたらない。

にもかかわらず、石屋原城の機能の解明には、この山城関所論は極めて有効である。なぜならば、城の立地、構造はいわゆる典型的な境目の城、つなぎの城で、当時の交通路を押えるために築かれた城、としか考えられないからである。

翻って考えてみると、中世の交通路の解明には、山城の研究は必要不可欠なのではあるまいか。山城に命をかけた武士達は、当時の交通路にそって山城を築いたはず。逆に言えば、山城跡をつないで行けば当時の主要道が浮びあがってくるはずである。

石屋原城の場合、江戸期の文献には城主として杉原氏、或はその家臣入江氏を挙げており、神石郡に所領を持つ杉原氏が、その本拠府中市八尾城との連絡用にこの城を築いた可能性が高い。とすれば両城の間に残る山城跡を結んで行けば、往時の道が現われるかも……。

しかし、その解明の糸口は机上にはなく、今後の踏査次第である。

「会 話」

小島 装彦春

一九九一年三月十七日バス例会の時、

私「福山市の山手町の辺りの海抜はどのくらいあるのですか？」

K氏「五、六米ぐらいかな」

私「するとあの辺りは、古代は海で港（津）があった、と云われて居るのは問題がありませんね。」

海面の高さがほぼ現状で安定したのは、五、六千年前と云うし、縄文海進の最高時でも現在より三、四米高いぐらいと云いますから」

K氏「だから、それが何時の時代の事を云うのか、が問題なんだよ、海であったと云うなら、庄原市の辺りで鯨の化石が出て居る位だから広島県全部が海の中、と云う訳だ」

私「その通りですね、中国地方の山地は石灰石の産地で鐘乳洞も多いけど、元々石灰石は海中の微生物が作り出したもの、と云いますね」

K氏「私は以前、会長の田口さんとも論争した事があるが、福山市の津之郷は津の字が付くから、古代の港なのだ、と云う単純論には反対だよ」

私「それは又、どう云う方法で見るとは都の字も当てられるし通とか角とか鼻なども音としては近い、更に内陸部にも津口とか津山とか多いから、私は福山市史にもある様に、都宇郷の変化だと考へて居る。今日行った木村城のある所も都宇郷だろう、あそこも港としての」

私「浅い入江があったとしても、干潮で干上がる様では港とは云へませんね」

K氏「私はね、史跡を尋ねる旅行もするし、探訪会にも参加するが、必ずしも史跡が目的ではなく、もっと重要な意味があるのだよ」

私「エ、エ、それは又どう云う事ですか？」

K氏「鉱石、鉱産物の有無さ」

私「それは又、どう云う方法で見るとは都の字も当てられるし通とか角とか鼻なども音としては近い、更に内陸部にも津口とか津山とか多いから、私は福山市史にもある様に、都宇郷の変化だと考へて居る。今日行った木村城のある所も都宇郷だろう、あそこも港としての」

利と云う面もあるが実は、金、銀、銅、鉄と云った物がそれ以上に重要だったのさ」

私「そう云えば甲斐の武田の強さは、金の産出量にあった、と云われませんか」

K氏「武士ばかりではない、坊さんも、だよ」

私「お坊さんですか？」

K氏「勿論、本山とか朝廷とか又は武士などの命令とかもあるがね」

私「ウーン、分かります、高野山には丹生神社が祀られて居ますが、丹と云うのは、丹砂又は辰砂とも云い水銀の原料ですね、弘法大師があそこに本拠を構へたのは水銀が目的だったのですかね」

K氏「弘法大師の事は分らないが、僧なら全国の山野を自由に歩けるからね」

私「そう云う知識や技術を持った僧侶が多かった事でしようね。所で鉱物の有無は、水にどの様に現われるのですか？」

K氏「川水の色で見分ける、例へばこの沼田川、あんたにどう見へるね」

私「サー！この所、雨が多かったです、濁り気味だが、一応底まで

とも論争した事があるが、福山市の津之郷は津の字が付くから、古代の港なのだ、と云う単純論には反対だよ」

私「それは又、どう云う方法で見るとは都の字も当てられるし通とか角とか鼻なども音としては近い、更に内陸部にも津口とか津山とか多いから、私は福山市史にもある様に、都宇郷の変化だと考へて居る。今日行った木村城のある所も都宇郷だろう、あそこも港としての」

私「浅い入江があったとしても、干潮で干上がる様では港とは云へませんね」

K氏「私はね、史跡を尋ねる旅行もするし、探訪会にも参加するが、必ずしも史跡が目的ではなく、もっと重要な意味があるのだよ」

私「エ、エ、それは又どう云う事ですか？」

K氏「鉱石、鉱産物の有無さ」

見へる様ですな」

K氏「それだよ、水の澄み具合の微

妙な所で見分けるのだ」

私「?、?、?」◎

K氏「坊さんと云へば、仏前とか、

会式とかで良く香や練香を薫く

ね、あの意味は何んだと思うか

ね」

私「あれは薫香、即ち良い匂いで心

を落着かせる為でしょう」

K氏「まあ、それもあるがもっと根

本的な深い目的もあったでしょ

う」

私「エー、そこまで・ウーム、そ

うでしような、さもありなんで

すね」

K氏「何んの事ですか?」

私「いや、だからその線香の事です

よ」

K氏「それで・」

私「ほら、松本清張さんの小説にあ

るでしよう、眩人、という、僧

玄防の事を書いた」

K氏「・・・」

私「その本に大麻の効用と、使用法

に付いて書いてあります。

イ、煙を吸う　ロ、喰べる　ハ、

溶液又は薬酒に加工して飲む、

とあります。又その外に護摩に

付いても書いてあって、やはり

麻の葉を燃やして煙を吸い、次  
第に恍惚状態となる、とありま  
す、小説ですがね」

K氏「大体そう云う事だ、麻葉を含

んだ煙によって、自他共に夢幻

状態になり信仰の不思議さを体

験するのが目的だったのさ、現

在はその形式が香となって残っ

て居るのだな」

私「……………」◎

K氏「煙と云へば現在は地球の大気

の温度上昇とかで大分騒いで居

るな」

私「あ、フロンガスのオゾン層破壊

とか、酸化化合物による温室効

果の事ですな」

K氏「温度が上る、とか下がるとか

騒いでも比較する数値や状況が

分らなくては、無意味な騒ぎで

終るだろうよ」

私「どう云う事ですか?」

K氏「地球上の平均気温が、何度位

上下すれば、それぞれどうなる

か、実証がなければ机上の空論

じゃろが」

私「その通りですな」

K氏「日本で、いや世界でも気温や

気候の観測記録を始めてから現

在まで、たかだか百年余りだ、

その程度のデータで地球の將

来の予測が出来るなどとても  
ないよ」

私「……………」

K氏「日本には、世界で唯一ヶ所、

四百年以上に涉って記録を取り

続けて居る所がある、だからそ

このデータを解析する必要がある、

何しろ四倍以上のデータ

ーだから、かなり確かな予測が

出来る」

私「エー、それはおっしゃる通りで

すが、一体何処なのですか」

K氏「諏訪湖の近くさ」

私「……………」

K氏「冬の諏訪湖では独特の現象が

起る」

私「神渡りの事ですか」

K氏「神渡りはその年の気象、温度

によって発生の時日や状況が異

なる、諏訪神社ではその記録と

所見、農産物の豊凶を四百年以

上に涉って取り続けて居る」

私「貴重なデータですね」

K氏「貴重だと云う事に役人達が気

が付けば良いがね」◎

一九九一年十月

### 短歌三題

内海 伴江

おおかたを

渡り終えたるつり橋の

尚ゆれおりふみしめ歩む

つり橋を

渡りて入りし四国村に

砂糖しめ小屋こうぞ蒸し小屋

竹群に

沿いて曲りぬ木犀の

いずこより匂うと語りあい

つつ

### 事務局より

☆そろそろ来年度の計画を決める季節がやって来ました。

例会の目的地など御希望をお寄せ下さい。

☆山城志の原稿はまだ間に合いますので遠慮なく御投稿下さい。

一九九一年度後期・福山市立女子短期大学・市民ゼミナール

### 史跡見学 ―古墳めぐり―

私たちの身近にある古墳を訪ね、歴史を体験してみましよう。

見学場所……二子塚古墳、宝塚古墳、狐塚古墳、山の神古墳

※いずれも福山市駅家町

日時……十一月二三日(土) 九・三〇～一五・三〇

※小雨決行

講師……田口義之さん(備陽史探訪の会会長)

山口哲晶さん(備陽史探訪の会副会長)

集合場所……JR福塩線 近田駅(午前九時半)

携行品等……昼食、受講票、山歩きのできる服装、靴

募集人数……一〇〇名(先着順)

参加料……三〇〇円(保険料、資料代)

- |       |            |       |          |
|-------|------------|-------|----------|
| 九・三〇  | 集合、受付(近田駅) | 一三・三〇 | 山の神古墳    |
| 一〇・二〇 | 二子塚古墳      | 一四・〇〇 | 法成寺公民館   |
| 一一・〇〇 | 宝塚古墳、狐塚古墳  |       | (スライド説明) |
| 一二・一五 | 昼食(服部池)    | 一五・三〇 | 解散(駅家駅)  |

#### 申し込み方法

往復はがき、または封書(返信用はがき同封)に、講座名、住所、氏名(ふりがな)、電話番号をお書きのうえ、左記まで申し込んで下さい。

申込・問い合わせ先

●七二〇 福山市北本庄四丁目五番二号

福山市立女子短期大学 市民大学委員会

TEL(〇八四九)二五一二五一

### 六月例会を終えて

担当者 種本 実

予報が見事に外れた好天の下、予定通り無事高松・足守例会を終える事ができました。いつもながら、会長さん宅での電話による申し込み受け付けから事務局による資料製本、会計、バスの手配等々のご苦勞に厚く御礼申し上げます。

天下布武(武力による制覇)を掲げた織田信長の中国平定における最大の決戦となった備中高松城の攻防と、城主清水宗治、織田軍総大将羽柴秀吉をはじめとする武将の生きざまを岡山市文化財モニター林さんに語っていただきました。氏の名調子に、しばし四百年前の湖水に浮かぶ高松城に立たずんでいるような幻想に、浸った方も少なくなかったようです。

私も車中にて天正十年(一五八二)の高松城の攻防に至る背景、毛利氏の中国統一と信長の台頭による室町幕府の崩壊を絡めて話そうとしましたが、遺憾ながらにわか勉強ぶりをさらすことになってしまいました。一つ分かったことは、マイクには

不思議な魔術が有って頭脳の指定にはお構いなしに、近づいた口元に勝手に喋らす力が有るようです。魔術に感わされず、自己流の話術が出来るにはまだまだ修業を要すことも思いました。

ところで、切腹という武士の究極の作法がいつ頃から始まったのか知りませんが、清水宗治の場合文献に依れば敵味方七万五千余の将兵農民が取り巻く湖上の舟中とのこと、これ程大勢の観衆の前で切腹を行った武将もいなかったことでしょう。

宗治の死を想うとき、広島県人として毛利方の織田軍に対する消極性がやや不満ではありますが、講和を守り、かつその後毛利輝元へ向けられた寧々の甥秀秋を小早川家へ引き取るなど、降景の功績は多大であったといえます。

それに対比して、明智光秀の行動は不可解です。単なる遺恨だけでは浅野内匠頭と同じレベルであり感情に溺れる光秀とも思えず、かといって天下を狙うには計画性がなく、やはり旧主足利義昭の密命もしくは、義昭にとって逆臣であり、かつ比叡山の焼き討ちなど極悪非道の信長が天下を取ることに、光秀は義憤を駆られていたと考えざるを得ません。



焼け落ちる本能寺で、湖水の舟上で、二人の武将が自刃すること大きく転換した天下取りを、草場の陰から見守る光秀の胸中やいかほどであったことでしょうか。

「人は石垣、人は城」武田信玄の名言に、また信長、秀吉、家康の覇権への歩みをみると、人の生き方々とはなどとガラにもなく瞑想しています。

「人生百年」の今、これからは備探の会の皆さんとの楽しい一時を大切にしたいと思っています。今後共よろしく願います。

（六月二十日）  
ありがとうございました。

## 銀河を食べたい!!

### ―食欲の秋―

Y・T

めつきり涼しくなり、ふと夜空を見上げると満天の星空……。ここ福山ではそんな光景は全く望めなくなっていました。それでも車で四五〇分も走れば空に穴が空いているのではないかと思うほどの星空を見ることが出来ます。

一口に「美しい夜空」と言っても人それぞれに色々な場所を思い浮か

べられることと思いますが、私が思い浮かべるのは「美星町」です。このところ様々なイベントをしたり、「光害条例」なるものを出したりして星空の美しいことで知られるようになって来た町、美星町。よく「美しい星の町」だから「美星町」という名称なのだと思われるのですが、本当はそうではありません。いつのことか詳しくは知りませんが、美山村と星田村とが合併して美星町になったのです。もっと詳しく言うと堺村・明治村の併せて四つの村が合併したということです。

国道一八二号線を北へ、かつて何か歴史的なものがあつたのではないかと出内先生のご研究の地を右に見て三―三号線に乗り換え、那須与一ゆかりの地井原では三―三号線を外れて小田川沿いを東に走り、小田の坂を越えると宿場町矢掛町にはいます。矢掛の本陣はまだありますが、ここから北へ、山をぐんぐん登って行くと、美星町にたどり着きます。星のことでかなり名を売って来ましたが、ここはまた歴史の町でもあります。現在、歴史公園が整備されています。山城か砦か何かを復元しています。昔の民家も再現してあります。どうい武将がいたとかどんな歴史が繰り広げられたのかそこまでは全く調べていませんが、矢掛から上って来る途中にも小さく「小笹丸城跡」という看板が立ててありました。古墳も幾つかあると言っています。いずれその歴史公園が完成したら、我が備陽史探訪の会でも訪ねてみたらどうかと密かに願っているのですが……。

そして、食いしんぼうの私としては、「銀河」と「彗星」を食べようと思っているのだ。さらに、備中神楽でも見物できれば最高なのだ。秋は祭のシーズン。トントコトンノ（ちなみに、銀河と彗星はアイスクリームとヨーグルトの商品名だ）

仲秋の名月  
「月々に月見る月は多けれど、月見る月はこの月の月」  
旅館の庭先にすわってしばし月を愛でておりました。

## 旅行記

野坂 芳泉

した。（ヤッホーのKさんが夜景も今や億万ドルだといったけどなるほど納得。）

さて、記憶のさめやらぬうちに、旅日記なるものを記しておこうと思えます。

一日目、丸亀城、敷きつめられたなんとも美しい石垣に、目にとび込んだ、白鳥の恋のセレモニー、私の気分は、ルンルンです。

善通寺、お遍路さんの白装束が目にしみる彼岸の中日前日、お坊様四、五人が歩いてこられるのに出会った。手を合せて頭を下げると手を合せて返された。ああ、ありがたや！ありがたや！弘法大師の誕生から入定まで絵馬に描かれて寺の格がしのばれる。入口にあるさすり地藏様のあちこちを思いきりおさすり申し上げた。（さてさて御利益の程は、期待してます。）

宮ヶ尾古墳のめずらしい線刻された古墳の壁を直接玄室の中に入って見れた喜びと同時に真暗な中で古代人が呼びかけてくるような不気味さがただよって複雑な感動を覚えていました。

善通寺郷土館にて蘭引の実物を見落したのがとても残念であります。バスは初日の締めくくり、神谷神

社へ。残暑厳しかった日中も、ここの心地よい初秋の風は身も心も洗ってくれる。あれほど駆けめぐっていた頭の血も一瞬停止する。静寂の中に古代の神々を祭る社は威厳を感じさせてくれます。

一日目無事終り、自慢の三段腹を湯舟に浮べて一日の疲れをとり、充分眠った二日目、楽しみの鬼ヶ島洞窟です。子供の頃読んだ本を思い出して、一時小供に返り鬼に見送られ洞窟を後にしました。(鬼の王様は入口に住んだと聞いて、鬼の悪がしこに感心)

栗林公園、茶室でいただいた麦茶のおいしかったこと。(おかわりした人がいたっけ) 部屋から見る庭園は、額に入った一幅の絵を見ているようでした。

最後、四国村、入口の祖谷のわずら橋は突然の肝だめしかと思われた。ゆれることゆれること。落人の命の橋であるうつり橋も今は観光の橋になっただけ。この橋を渡ったなら、幸せが待っている。こんな橋を渡ってみたい。この橋を渡れば、田舎の旧家がある。次々と見ていると殺伐とした現代の生活がうとましく、何もない昔の生活がうらやましく思われてなりません。

思ったより早く福山に着き、バスから降りると二日間共に過した人達との別れがさびしく一人々センチクになって居りました。

旅行委員の人達の、計画から下見、当日の世話と休まる事もなく、御苦労は大変なものであったらうと感謝して帰りました。ほんとに楽しい旅を有難うございました。

ここで一句……うーん。  
出ないのがくやしい!

## 白石島、真鍋島探訪記

種本 実

十月某日、白石島と真鍋島に行く。八月下旬NHKテレビで、笠岡諸島が紹介された番組を見たのがきっかけで両島に関心を持ち、先月に続いた探訪である。

九時二十五分発の丸亀行き高速船には、前回のように丸亀競艇へ行く人もなく乗客は私一人。今日の浜辺は釣り人もいなく、寄せては返す単調な波の音だけが鼓膜に響く。夏の一時の喧騒とは対象的な黄昏の光景。白石島では先ず、源平の合戦で戦死した武者の供養塔と伝承されている五輪塔を訪ねる。島の共同墓地にあ

ると聞いていたが分からないので土地の人に案内してもらおう。想像していたより小さなもので、ずんぐりとした石塔は褐色の表面が永年の風雪の為かあばた模様であった。港に、歴史に詳しい方が居るとのことです。早速お邪魔して色々教えていただくことができました。

白石島が全国的に名を広めているのが、国指定重要無形民俗文化財の「白石踊り」である。元は回向踊りと云って、源平の水島合戦(寿永四年・一一八五)などで戦死した兵士の霊を供養するための踊りであった。いつしか変遷を重ねるうちに当地の盆踊りとして位置づいたが、昭和二十五年に全国芸能大会に中国五県の代表として出場したとき「白石踊り」と命名され、今日の形になったそうだ。現在では、七月から八月の海水浴シーズンに砂浜で保存会が観光用に披露している。

オレンジ色の長い塔身が目立つ異国情緒の仏舎利塔は開龍寺。ここももとは、源平の水島合戦で戦死した武者の菩提寺だった。後に、水野家の祈願所となり改易後は神島八十八か所の奥の院となり、春にはお遍路さんが絶えないとのこと。

数年前の山火事によって、緑が失

われ花崗岩の山肌があらわとなっている。山頂には今にも倒れそうに巨岩が見えるが、尾根づたいに遊歩道が整備されており、ハイキングには快適なコースとなっている。

午後の笠岡発の下りの便で真鍋島に渡る。前回行けなかった真鍋城址を訪ねる。山道に寒菊がたくさん栽培されている。開花時期を冬にずらす為夜電灯を付けていると、途中立ち寄った閑散としたユースホステルで聞いた。一、二月の見頃時期にまた来て見ようと思いつきながら細い農道を登る。倒れかかった看板にかすかに「真鍋城址」の文字が読める。行き止まりの岩を蜘蛛の巣に悩ませれつつ登ると、「笠岡市指定 真鍋城址」の立札と小さな祠が祭つてある城址にたどりついた。曇天の下、静寂の城址に音も無く枯れ葉が舞い、灌木に張りめぐられた網の目のような蜘蛛の巣と、朽ちた雑木などが横たわり帰途を断つかのよう行く手をさえぎる。と、ただならぬ気配は落武者の怨霊か?……。よろめいて足元に視線を落とすと鎌首を持ち上げたへびが数匹、危ない!……。不気味な空想を追い払うように、人家を直指し山を駆け下る。

一息入れた後、もと郵便局長真鍋

さんを訪ねる。船の到着の度に郵便物の発送、受取りに港へ出る合間にお宅でお話をお伺いさせて戴いた。先祖は代々庄屋を勤めた由緒ある家であることはテレビでも紹介していたが、武具や蔵が現存してある邸内全体がタイムトンネルで数世紀前を再現しているように見えた。

真鍋島は藤原家の水無瀬一族が領した「真鍋の庄」であったが、一族が都落ちして当島に居住するようになり、「真鍋氏」を名乗ったと推測出来るとのこと。源平の戦いでは平氏につき、中世は因島の村上水軍に従い毛利勢として織田軍と戦い、関ヶ原以後は水野氏の備後移封まで池田、松平氏(備中高梁)などの領地となった。当時は、旧毛利勢であったため真鍋氏を捨て「三宅氏」を名乗り、幕末(天保)になって再び真鍋氏を名乗ることが出来たそうだ。

宝塔(まるどうさま)、五輪塔群(鎌倉期)など真鍋氏の墓が在りし日を偲ばれる。

古来より、豊富な漁業資源に恵まれて財政は豊かであり歌舞伎座も有ったとか、江戸・大阪に献上したタイなどの数量は目をみはるようだったとか……。水野氏後は天領となつたのもうなずける。

終戦後は都会からの疎開で三千人の人口を抱えた時期も有ったそうだが、今では六百人程で小学生は全校で二十人余りとのこと。過疎化対策として笠岡市から島づたいに橋を架ける計画もあるそうだが、島の人にはそれ程の待望感は無いらしい。瀬戸大橋時代と云われる中、悲喜こもごもの実態が語り伝わっていることも起因しているが、観光客にとっても連絡船の旅情と、島独自のふるさとの味は何物にも代えがたい。

帰途乗り換えに降りた白石島で偶然出会ったのは、チャーター船に乗ってどこからか帰ってきた中学生一行約三十名。健康美と逞しさが眩しかった。島々の発展を願いつつ、連絡船の朝に濡れた窓から夕闇迫る瀬戸内海を見つめていた。

(一九九一・十・二十)



### 受贈図書目録

(その一)

御調文学(御調町教委刊)

●御調町の地名

●御調町の民家について

甲府盆地の古墳(練馬區史研究会刊)

●信濃と駿河から文化が中返町に流入して、そこで前期古墳文化を形成した後に、東方へと支配を延し、大和朝廷が六世紀前半に統一したと考える。

秩父古墳調査最終報告書(歴史民族研究会刊)

●秩父地区の古墳測量、わらび手刀との関連……。

みよし風土記の丘(同上友の会刊)

1号:神辺町の寒水寺裏山出土埴

4号:因島の海賊衆・世羅町賀茂

出土の経筒

6号:吉舎町の山城・寺町廃寺の土管

9号:矢谷古墳(四隅突出型前方

後方形墓)

もとやま15~19号(本山町郷土史会)

16号:八尾城史(田口義之)

17号:頼春風と府中人文との交流

(田坂英俊)

18号:元禄検地と本山村(高橋孝二)

19号:本山地名考(小林桂一郎)

12~17号府中の歴史(藤木英太郎)

歴史研究広島(歴史研究会広島備南支部刊)

創刊号~第8巻第四号まで各号

ひがしひろしま郷土史研究会ニュース

第一一三号~第二〇六号

(一九九一・一〇)

坪生がわかる写真館(つばう郷土史研究会)

広島県立歴史博物館ニュース(八号)

県立歴史博物館

県博友の会ニュース(県立歴史博物館友の会) 創刊号

☆受贈図書の閲覧を希望される方は七森事務局長(電話五三三〇三七〇)まで。

☆会報五十三号の原稿を募集します。原稿用紙五枚以内、内容は自由です。十二月末日までに事務局宛にお送り下さい。

### 事務局より

### 十一月例会参加者募集

## バスツアー小早川氏の氏寺を訪ねて ―三原市、豊田郡本郷町の古寺めぐり―

講師 当会参与 提 勝義

(期日) 十一月十七日(日)

午前八時福山駅北口キヤ

ッスルホテル前集合

(八時半発)

※午後五時十分帰着予定

(主な見学地) ※見学順

● 三原城跡：小早川隆景の築城

● 宗光寺：福島正之の墓、山門

は新高山城の城門を移建(重文)

● 三原民俗資料館

● 善根寺：平安前期の古仏群あり

● 米山寺：鎌倉時代、小早川氏

が不断念仏堂として創建。

小早川氏(沼田)歴代の宝篋

印塔は壮観である。

● 楽音寺：平安末期沼田氏一族

によって創建され、のち小早

川氏の氏寺となる。本堂の要部は平安期の創建(現解体修理中)、中世文書が残る。

※問い合わせは事務局まで

### 事務局日誌

(平成三年七月)

七月二八日(日) 於福山城湯殿

太平記座談会に参加四十八名

基調講演 田口義之

テーマ別 出内博都(山内一族)

研究発表 後藤匡史(陶山一族)

司会 神谷和孝

同日県立三次風土記の丘にて

広島県歴史研究団体連絡協議会総

会開催 当会より代表として山口、

中村両副会長、中西参与出席。

八月二五日 於中央公民館 役員会、

事務局会議 八名出席

九月一日(日) 於福山城湯殿

歴史講演会開催 参加二十名

講師 市教委文化課園尾裕氏

テーマ「窪田次郎とその一族」

同月八日(日) 於中央公民館

役員会 七名出席

九月一五日(日) 於中央公民館

役員会、事務局会議 八名出席

同月二二・二三日 秋期一泊旅行

バスで丸亀城、善通寺周辺の史跡

を見学して五色台簡保センターに

宿泊。二日目は女木島、四国村を

見学、一路福山へ 四十六名の参

加者を得、好評のうちに終了

一〇月六日(日) 於中央公民館

役員会、事務局会議 十五名出席  
十月例会の案内状の発送及び例会  
資料作りを行なう。

十月二〇日(日) 十月例会

バスツアー神石町の史跡めぐり

辰の口古墳、泉山城、八尾城等を

見学して神竜湖で休息、福山へ帰

る。講師は出内博都氏

参加四十七名

### 十一月、十二月 スケジュール

十一月十五日第四五回中世を読む会

同月十七日十一月例会(12P参照)

十二月一日 十二月例会(2P参照)

同月十五日 歴史講演会(テーマ

「草戸千軒の商い」草戸千軒

町遺跡調査研究所下津間康夫

氏)終了後忘年会(於福山ワ

シントンホテル) ※後日御

案内致します。

同月二十日 第四六回中世を読む

会

備陽史探訪の会

事務局

〒720 福山市多治米町

五十一一九一八

TEL (0849)53-6157